

## 一人ひとりが 「自然を愛する心」を 培うためにサポートする

小川結希さんは自然と人との仲立ちをするインタープリターです。自然を解説するだけでなく、さまざまなプログラムを作り、一人でも多くの人に自然を大切に  
する気持ちを培ってもらうように工夫を凝らした活動をしています。お話からは  
インタープリターという仕事に対する熱い思いが伝わってきます。

### ● インタープリター 小川結希さん

おがわ・ゆうき ● 東京都生まれ。小さいころから自然や動物が大好きで、高校時代には獣医を目指したこともある。大学院生時代にインタープリターの養成研修を受け「これこそ自分の仕事」と考えるようになった。大学院卒業後、(株)自然教育研究センターに入社。環境教育普及のためのさまざまなプログラムの開発やイベントの企画、その実施を担い、インタープリターとして活躍。東京都立奥多摩湖畔公園「山のふるさと村ビジターセンター」に解説員として在籍。



### 衝撃を受けた

「インタープリター」との出合い  
—— もともと自然に関心があったので  
すか。

小川 小さいころから、外で体を動かして遊ぶことが大好きでした。植物や鳥の名前を覚えて知識を増やすというのではなく、とにかく自然の中で何かと出会うことが好きでした。アリの巣でも殺すことができません、捕まえた虫もそのまま自然の中に放していました。——  
—— それでインタープリターという職業に就かれたのですか。

小川 確かに少女のころから自然が大好きだったというのは、インタープリターという職業を選んだ原点かもしれません。しかし当初からインタープリターを志していたわけではないのです。実は高校生のころは獣医になろうと考え、そのための勉強を始めていました。というのも私はチーターが大好きで、獣医としてアフリカで働きたいと思っていたからです。ところが獣医学科では動物の解剖実習があります。獣医なら動物の安楽死を判断しなければならぬということもあるでしょう。先生から「虫も殺せないのにそうしたことには耐えられるか」というア



施設内でもさまざまなインタープリテーションを行う。小川さんは「この仕事を一生続けていきたい」と言う。日本ではインタープリターの職業としての認知度が十分ではない。だからこそ「きちっとしたプログラムを提供し、それに見合うお金をいただけるようにしたい」とインタープリターを職業として確立することにも情熱を燃やす。

ドバイスもあり、進路を変更しました。

大学は森林資源科学科という学科に進み、森林の生態などについて学びました。そこで熱心に環境教育の大切さを唱える先生に出会いました。その先生の下でボランティアとして小学校を回り環境教育のお手伝いをしたのですが、子どもとの触れ合いがとても楽しかったんです。また自分のもっている知識を伝えることにも大きな喜びを感じました。そんな中で漠然と「こういうことを仕事にできたらいいなあ」と思うようになりました。

大学院生のときに先生から「インタープリターが注目されるようになってきた。研究してみたら」と声をかけていただきました。そこで私が現在在籍している会社が開いたインタープリタ

—— 養成のための研修に参加したので  
す。この研修で自然の大切さや面白さを人に伝えるためのコミュニケーションがこんなにも楽しいのかと衝撃を受けました。大学で学んだことが生かせるのではという思いもあって、「自分の仕事はインタープリターしかない」と考えるようになりました。ほかの就職活動は一切しませんでしたね。

### 多彩なプログラムを用意し

自然との付き合い方を学んでもらう

—— インタープリターとはどんなお仕事をされるのか、教えてください。

小川 私たちの仕事は自然からのメッセージをどんなふうを受け止めたらいいのか、一人ひとりが考えるきっかけを提供することです。具体的な仕事の中心となるのは、ビジターセンターを訪れるお客様のためにさまざまなプログラムを用意し、自然との付き合い方を学んでいただくことです。

施設内で行うスライドショーや自然物で作る簡単なクラフト、園内の自然を楽しみながら歩くガイドウォーク、さらにキャンプもあります。キャンプといっても、親子がともに参加するもの、あるいは子どもの成長に合わせたもの、女性を対象としたものなど多くのプログラムがあります。キャンプに限らず、プログラムが少ないと、お客様の個性に見合ったものが提供できず、十分な効果が得られないという問題があります。そのため私たちはでき



ガイドウォーク。「三つのU」と「三つのT」を心がけながら、プログラム参加者たちの自然を大切に作る気持ちを醸成させていく。

るだけ多くのプログラムを用意しています。また、団体向けにオーダーメイドのプログラムも実施しています。プログラムの内容は、季節ごとに違います。また参加する人の自然へのかかわりの度合いや目的によっても違います。プログラムの内容は無数と言えるほど多種多様です。

——お仕事ではどんなことを心がけていらっしゃいますか。

小川 私たちが行っているのは、自然を大切にしたいという気持ちを育てるための「環境教育」であって、遊びではありません。そうした観点から「三つのU」と「三つのT」を心がけています。「三つのU」とは「打ち解ける」「受け止める」「促す」を意味しています。「打ち解ける」とはお客様との距離を

縮め、緊張をほぐしながら接するということです。過度に緊張しているとプログラムに参加していただいても十分に学ぶことができません。「受け止める」とは参加者それぞれの自然に対する感性や考え方を大切に、「どこかな」と思うようなことでも否定しないということ。自然に対する感性や考え方はそれぞれであり、まずそれを受け止めることが大切なのです。

「促す」とはできるだけ指示をせず、自分の意志で学べるように促すということです。「やらされる」より、自分の意志で「やる」ほうがより深く学ぶことができますから。「三つのT」とは「楽しく学ぶ」「互いに学ぶ」「体験から学ぶ」を意味しています。「互いに学ぶ」とはお客様同士だけでなく、インタープリターもみなさんから学ぶということも含んでいます。

### 自然に対する思いがより深くなる 変化に立ち会える喜び

——お仕事の面白さややりがいは何なところにあるのでしょうか。

小川 お客様がプログラムを通して、自然に対してより深い思いをもってくださるとてもうれしいですね。それまで自然への関心がありませんでしたが、たまたま私が担当したプログラムに参加されたことがあります。参加後、その方は自然に対する思いが劇的と言つてよいほど変わりました。その後、

毎月のようにプログラムに参加してくださるようになりました。

同じプログラムでも、お一人お一人反応が違います。そうした自然に対するさまざまな思いと自分が一体になるのは、私にとつてかけがえのない時間です。

——厳しさはどのようなところにありますか。

小川 当然のことながら野外活動では、安全に万全を期さなければなりません。しかし、安全管理が過剰になれば、深く自然を感じることもできません。十分な自然体験と無理のない安全管理の兼ね合いをどう考えるかは悩ましいところです。

「自然の中で仕事ができるいいですね」という声を聞くことがあります。しかし、私たちの仕事はかける時間からすると、お客様と直接かわからないものが大半です。例えば展示の更新や新たなプログラムの立案、もろもろの事務作業などたくさんありますが、このそれが大変ではありませんが、このようなお客様に見えない仕事は、みなさんに喜んでいただくための準備作業であり、とても大切な時間です。

——インタープリターを目指す人にアドバイスをお願いします。

小川 時々、インタープリターの養成講



子どもを対象としたキャンプ。小川さんは、「インタープリターによる環境教育は人間形成にも大きく役立っている」と言う。子どもを対象としたプログラムではマナーや礼儀をはじめとする人とのかかわりやコミュニケーション力を育てることも大切にしている。

座の講師をしています。そこに参加している方の経歴はさまざまです。転職してインタープリターを目指すという方も少なくありません。私がいつも思うのは、一見、インタープリターの仕事とは何の関係もないものでも熱心に向き合つことの大切さです。アニメでも、ファッションでも、デザインでも、あるいは絵を描くことでも料理でも何でも構いません。そこで得られた技術や知識は、例えば魅力的なプログラムを立案したり、素敵な展示物を作ったりすることにも役立つと思います。私にはほかの仕事の経験がありません。それだけに、もつと他の仕事の経験や専門知識が多ければなあ、と思うことはしばしばです。